様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０２７８

研究課題名（和文）ヴィクトリア朝の文学テクストによる自殺の社会的・心理的要因の解明

研究課題名（英文）An Analysis of the Social and Psychological Causes of Suicide in Victorian Literary Texts

研究代表者
松岡　光治（Matsuoka, Mitsuharu）

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：７０１８１７０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ヴィクトリア朝の文学テキストにおいて明示的／暗示的に描写された自殺に関する言説を中心に、当時の非文学領域の文献や主要ジャーナルに見られる自殺の言説を並行して分析し、産業革命後の急激なパラダイムシフトによって生じたヴィクトリア朝の新たな時代精神と社会風潮に抑圧され、その圧力に耐えきれない人々が極度の孤立感と絶望感から心の痛みに対する意識を停止させた自殺という行動の社会的および心理的要因を突き止めた。

研究成果の概要（英文）：This research addressed the issue of suicide explicitly/implicitly described in Victorian literary texts and discussed in literary and non-literary journals of the time. The cultural paradigm shift attending the Industrial Revolution created new psychological pressures for citizens faced with a broad range of social changes and repressive conditions which often generated isolation and despair. The research clarified the way in which suicide, as an extreme measure taken to erase emotional pain, was thus sustained by the social and psychological contexts of Victorian Britain.

研究分野：人文学

キーワード：自殺　狂気　ヴィクトリア朝　ディケンズ　ギャスケル　ギッシング　社会的文脈　心理的文脈

１．研究開始当初の背景

日本では、自殺死亡者が 1998 年に前年より 8,000 人以上も増えて 3 万人を突破し、それ以後は厚生労働省主導で幾つかの自殺防止対策事業が始まった。そして、2005 年の「自殺に関する総合対策の緊急かつ効果的な推進を求める決議」という政府全体での取組が、2006 年の「自殺対策基本法」の制定と 2007 年の「自殺総合対策大網」の閣議決定によって社会全体の取組へと変化した。これに合わせ、自殺に関する学術研究も量的には確かに増えたものの、日本における自殺研究の第一人者である高橋祥友・防衛医科大学教授の『自殺予防』（2006）や本橋豊・秋田大学医学部長の『総合自殺対策学講義』（2009）に代表されるように、大半の研究は内閣府が毎年発行する『自殺対策白書』のように予防と対策に主眼が置かれている。これは、自殺に限らず何事であれ、緊急事態に陥った場合、抜本的な根治療法のための原因究明より、応急処置のための予防と対策の方が優先されるからである。

一方、海外の学術研究では、WHO の連携組織として自殺対策で中心的役割を果たしている「国際自殺予防学会 (IASP)」や Alan Berman 会長の *Child and Adolescent Suicidal Behavior: School-Based Prevention, Assessment, and Intervention* (2010) で分かるように、これも自殺研究者の関心が予防と対策に偏っている。Bertolote, et al., *Psychiatric Diagnoses and Suicide* (2010) は、自殺既遂者の 90%以上が何らかの精神障害に罹患していたことを示しているが、自殺企図までには複雑な心的プロセスがあり、ストレスを与える直前の心理状態の解析だけでは不十分である。確かに自殺は一つの要因だけから生じることもあり、その場合の予防・対策は比較的容易であるが、大部分は数多くの社会的・心理的要因が複雑に絡み合った末に発生することを認識しなければならない。

ヴィクトリア朝の自殺研究については、Olive Anderson, *Suicide in Victorian and Edwardian England* (1987) と Barbara T. Gates, *Victorian Suicide: Mad Crimes and Sad Histories* (1988) があるだけで、しかも前者はエドワード朝、後者は世紀末に考察が偏っている。つまり、産業革命後に発達した資本主義がレッセ・フェールによって悲惨な格差社会をもたらしたヴィクトリア朝では、自殺企図の素地が十分にできていたにもかかわらず、その時代の前期と中期への視点が欠如しており、本研究が対象とする課題の大部分は今なお未開発のままである。その意味で、ヴィクトリア朝の文学テキストに見られる自殺の社会的・心理的要因の分析を通して、現代の日本社会における自殺の心理構造や心的プロセスを明らかにしようとする本研究そのものが独創的かつ革新的であり、特に自殺予防行政や自殺対策事業、そして社会心理学の分野への波及効果は大きいと考えられる。

申請者は社会学と心理学を中心に据えた隣接領域の方法論と研究成果を統合した学際的視座に立ち、平成 17～19 年度科研費・基盤研究 (C)「ヴィクトリア朝文学における都市生活者の狂気：その社会的および心理的文脈の解明」と、平成 20～23 年度科研費・基盤研究 (C)「ヴィクトリア朝文学に見られるイジメの社会的および心理的文脈の研究」とで、狂気やイジメの問題を研究してきた。今回の自殺も、イギリス近代の文明社会が人間に強いた疎外感の結果として生じた点で、狂気やイジメの問題と密接な関係がある。また、ディケンズ・フェロウシップ日本支部の学会誌（第 29 号、2006）に、今回の研究の序論に相当する概説として「ディケンズにおける自殺の諸相」を寄稿し、本研究を進める上での準備作業を済ませていた。

２．研究の目的

2010 年における日本の自殺死亡者数は 31,690 人（推計によると自殺未遂者は自殺者の 10 倍以上）で 13 年連続して 3 万人を突破し、大震災と大津波に襲われた 2011 年は過去最多記録を更新することが予想される。非常に由々しき問題は、交通事故死亡者数（2010 年は 4,863 人）が 10 年連続して減少したのに対し、その間の自殺死亡者数は横ばいで、前者の 6.5 倍もあることだ。これは、交通死亡事故に高い犯罪性があるという理由で、飲酒運転根絶などに対する社会的な機運が急激に高まった結果である。遺族を不幸にする点においては自殺の死も交通事故の死も同じであるにもかかわらず、日本政府の自殺対策予算は交通安全対策予算の僅か 1,700 分の 1 にすぎない。

こうした状況に対処するために「自殺対策基本法」が 2006 年に制定された。「自殺は防ぐことのできる社会問題である」（WHO）ことを認識し、自殺を個人の問題としてのみ考えないとした基本理念はともかく、その内容は自殺防止と自殺対策についての基本的枠組を規定しただけで、具体的な制度や政策の規定がないので、自殺率の減少をまったく実現できていない。さらに重要な不備として、自殺の社会的・心理的要因を究明する視点の欠落が挙げられる。意識的／無意識的な自殺企図に想定される心理構造や心的プロセスを精査し、その原因を解き明かすには、日本国内の自殺の現象を微視的な立場で分析するだけでは不十分である。同じ自殺問題を抱えている先進諸国との通時的かつ共時的な比較検討を学際的に行わなければ、この問題の予防・対策はどれもその場しのぎの弥縫策に堕してしまうだろう。

戦後日本の自殺率には、価値観の転換に適

応できない若者の自殺が急増した 1950 年代の混乱期、85 年のプラザ合意以後の円高不況期、90 年代初期のバブル崩壊後から始まって今も続いている平成の大不況期という 3 つのピークがある。しかし、自殺の原因を単純化して、価値観の転換に適応できない思想問題に帰するにせよ、不況で生活できない経済問題に帰するにせよ、そこに個人の孤立を招きやすい「場」というものが存在している点を見落としてはならない。現代社会における自殺の主因である経済問題に関しては、戦後の日本が欧米の先進諸国と経済的に肩を並べようと一心不乱に暴走し、その反動と抑圧によって蓄積された心の歪みのエネルギーが放出された結果として自殺を捉えることができる。これは日本版レッセ・フェールの負の遺産に他ならない。

レッセ・フェールに支配されたヴィクトリア朝の英国と戦後の日本を比較するのは奇異に思えるかも知れないが、私たちは日本が一世紀ほど遅れて英国と同じ轍を踏んでいるという事実に目を向ける必要がある。実際、戦後の急速な工業化と都市化を経てからバブル景気を通して平成の大不況に突入した日本人は、産業革命後の鉄道・汽船による交通革命を経て「世界の工場」として経済と金融をグローバルに牛耳った大好況期のあとで、新興国のドイツとアメリカの工業化によって大不況に陥ったヴィクトリア朝の人々と同じ社会問題を幾つも抱えている。自殺をそうした社会問題から派生した複雑な心理的副産物として考えるならば、ヴィクトリア朝の時代精神と社会風潮という文脈の中で自殺の心理構造や心的プロセスを分析することによって、現代の日本社会において自殺数を激減させるための突破口となるような示唆的で意義のある結果を導き出せるはずである。本研究の最終的な目的は、そうした分析結果を自殺に関する研究分野の進展に貢献させることである。

３．研究の方法

本研究では、主としてディケンズ、ギャスケル、ギッシングの作品に見られる自殺問題を照射し、自殺は時代精神と社会風潮（特に社会ダーウィニズム的な世界観）が人間を抑圧して孤立感と絶望感という心理的負荷を与えた結果として生じる現象であるという仮説を立て、ジェンダー、階級、人種に加え、政治、経済、法律、宗教、教育、医療など、権力が偏りやすい非合理的な社会構造を理論的アプローチと実証的アプローチの両面から考察することによって、この仮説の実証を試みた。

しかし、いかなる理論の正しさもテキストの主観的・直感的な読みだけでは検証できないため、上記の小説家たちに加え、ヴィクトリア朝作家の電子キクストを使い、申請者のハイパー・コンコーダンス <http://victorian-studies.net/concordance/> を活用することで、さらには同時代の主要な文芸雑誌と新聞（*Household Words, All the Year Round, Bentley's Miscellany, Frazer's Magazine, Punch, Gentleman's Magazine, Penny Illustrated Paper, The Illustrated London News, The Illustrated Police News, The Daily Graphic, The Daily Mail* など）やヴィクトリア朝の政治・経済・医療関連図書に見られる自殺を扱った記事、そして社会心理学の自殺についての最新の研究成果を踏まえ、ヴィクトリア朝の人々の考え方や習俗などの根底にあるエートスが、どのような文脈で彼らの自殺を助長しているかを考察した。

４．研究成果

平成 24 年度は、ヴィクトリア朝作家の中で自殺の場面をもっとも興味深く描いたディケンズの作品に焦点を絞り、経済問題、健康問題、家庭問題、思想問題などに潜在する自殺の社会的・心理的要因を多角的に分析した。特に、ディケンズ作品に描かれた自殺に関しては、ヴィクトリア朝の時代精神と社会風潮を反映した経済および階級の問題に起因する強者の弱者に対する肉体的・精神的な暴力の結果、同時に自分自身の弱さや劣等性の投影による結果として位置づけた。その成果は、ディケンズ生誕 200 年記念として編集し、10 月 20 日に大阪教育図書から出版した『ディケンズ文学における暴力とその変奏』に現れている。そこでは、「まえがきに代えて——暴力と想像力」において社会的弱者を自殺に追い込む権力側の暴力に対抗するために、ディケンズが必要だと考えた想像力の機能について論じ、序章「抑圧された暴力のゆくえ」ではジェンダー、階級、人種に関してディケンズが暴力問題をどのように考えているかを明らかにし、第 2 章の『オリヴァー・トゥイスト』論では「逃走と追跡——法と正義という名の暴力」と題して、孤児の主人公オリヴァーが他殺や自殺といったキリスト教的な犯罪から逃れ、法と正義による追跡という権力側の暴力から逃れる際の心理的なメカニズムを解明した。

平成 25 年度も 24 年度に引き続き、ディケンズの作品に焦点を絞り、「研究の方法」で述べた「自殺は時代精神と社会風潮が人間を抑圧して孤立感と絶望感という心理的負荷を与えた結果として生じる現象であるという仮説」の実証を試みた。その成果は“Bedlam Revisited: Dickens and Notions of Madness”という論文となり、The Dickens Fellowship (London) 発行の国際ジャーナル *The Dickensian* の最新号（109 巻 3 号、Winter 2013）の巻頭論文として掲載された。この論文はディケンズ作品において人間が一定の社会的状況のもとで示す狂気のメカニズムを解明したもので、その論証の主たる対象は権力や権威の側による狂気の恣意的な定義のために社会で周縁化された弱者が罪悪感や絶望感によって自殺に駆り立てられるメカニズ

ムである。同時に、逆様の世界という語りの戦略によって、狂気を定義する者の側に潜在している狂気が弱者の言動によって逆照射される点も考察している。

平成 26 年度は、主たる焦点をディケンズから才能を見出された同時代の女性作家ギャスケルの作品に移し、明示的／暗示的に描写された自殺に関する言説を分析した。ギャスケルの前期に集中している社会問題小説（*Mary Barton*, *Ruth*, *North and South*）では、労働者たちとその劣悪な生活環境が細部描写されており、ヴィクトリア朝の時代精神と社会風潮を支配していたイデオロギーとしての自由放任主義によって、労働者たちの貧困をすべて自己責任の問題に帰す工場主に代表される有産階級の非・キリスト教的な無関心が無作為の罪（sins of omission）として提示されている。労働者階級の人間が駆り立てられる自殺の大半は、ジェンダー、階級、人種において支配的立場にある権力側が人間を抑圧して孤立感と絶望感という心理的負荷を与えた結果として生じる現象である。研究成果は出版という形にはならなかったが、ギャスケル没後 150 年記念として *Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell* の編集し、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）に申請した。

最終（平成 27）年度の前半は、ギャスケルの社会問題小説、特に『北と南』の中で描写された自殺に関する言説を詳細に分析し、""There's Good and Bad in Everything": The Status Quo as a Necessary Evil in *North and South*" という英語論文を書き、編著 *Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell* に収めて大阪教育図書から 6 月 30 日に出版した。後半は、後期ヴィクトリア朝の自然主義文学を代表するギッシングの初期における 9 つの短篇を翻訳するとともに、その「あとがき」において "The Sins of the Fathers" と "R.I.P." のそれぞれの女主人公が自殺に至る経緯を分析し、その主たる原因は父長制の既成のパラダイムが女性を二者択一の商品であるかのように〈家庭の天使〉と〈堕ちた女〉という二つのカテゴリーに分類していたヴィクトリア朝社会における身分違いの結婚へのギッシングの運命論的な悲観主義から生れたものであることを実証した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

(1) Mitsuharu Matsuoka. "Introduction." *Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell: Sesquicentennial Essays*. Osaka: Osaka Kyoiku Tosho, June 2015. 1-8. 査読有.

(2) Mitsuharu Matsuoka. ""There's Good and Bad in Everything": The Status Quo as a Necessary Evil in *North and South*." *Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell: Sesquicentennial Essays*. Osaka: Osaka Kyoiku Tosho, June 2015. 201-16. 査読有.

(3) Mitsuharu Matsuoka. "Bedlam Revisited: Dickens and Notions of Madness." *The Dickensian*. The Dickens Fellowship (London). 109.3 (Winter 2013): 225-39. 査読有.

(4) Mitsuharu Matsuoka. "Dickens and Mind-forg'd Manacles: The Mechanisms of Memory, Love, and Madness." *Dickens in Japan: Bicentenary Essays*. Osaka: Osaka Kyoiku Tosho, 2013. 174-90. 査読有

(5) 松岡光治「まえがきに代えて――暴力と想像力」『ディケンズ文学における暴力とその変奏――生誕二百年記念』（大阪教育図書、2012 年 10 月）v-xii 頁．査読無.

(6) 松岡光治「序章――抑圧された暴力のゆくえ」『ディケンズ文学における暴力とその変奏――生誕二百年記念』（大阪教育図書、2012 年 10 月）1-20 頁．査読無.

(7) 松岡光治「『オリヴァー・トゥイスト』: 逃走と追跡――法と正義という名の暴力」『ディケンズ文学における暴力とその変奏――生誕二百年記念』（大阪教育図書，2012 年 10 月）37-52 頁．査読無.

〔学会発表〕（計　0 件）

〔図書〕（計 4 件）

(1) Matsuoka, Mitsuharu.（編著）*Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell: Sesquicentennial Essays*. Osaka: Osaka Kyoiku Tosho, June 2015. xxv+538 pp. 平成 27 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）出版.

(2) Matsuoka, Mitsuharu.（共編）*Dickens in Japan: Bicentenary Essays*. Osaka: Osaka Kyoiku Tosho, May 2013. vi+229 pp.

(3) 松岡光治（編訳）『ヴィクトリア朝幽霊物語（短篇集）』（アティーナ・プレス，2013 年 3 月）334 頁.

(4) 松岡光治（編著）『ディケンズ文学における暴力とその変奏――生誕二百年記念』（大阪教育図書，2012 年 10 月）xii+288 頁.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
(1) 個人ホームページ
http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/
(2) The Victorian Literary Studies Archive
http://victorian-studies.net/
(3) ディケンズ・フェロウシップ日本支部
http://www.dickens.jp/
(4) 日本ギャスケル協会
http://www.gaskell.jp/
(5) 日本ヴィクトリア朝文化研究学会
http://www.vssj.jp/

６．研究組織
(1)松岡光治（MATSUOKA MATSUOKA）
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・
教授
研究者番号：70181708

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：